

## 英語教育42年に学んだこと

### What I Have Learned in Teaching English for 42 Years

石井 清

ISHII Kiyoshi

これは1992年1月16日最終講義として長野大学において教職員、学生約50人を前にして述べたものに補足を加えてまとめたものである。

#### I はじめに——私の教育者としての原点、前程

##### 1. 日本帝国の植民地朝鮮で生まれ育ったことの意味。他民族支配の不幸

私は大正13年(1924)に朝鮮半島の北部、鴨緑江のほとりにある町で生まれた。この町は後年できたダム湖の湖底になっている。父は福島県の出身で朝鮮総督府の役人であった。母も福島出身である。父の転勤のため私は生まれてから小学校5年(11才)まで5つの町(昌城→泰川→義州→江界→渭原)に住んだ。3年から5年までに通った渭原小学校は児童数20名ならずで、1人の先生が1教室の中で全学年に全教科を教えた。

1つの民族が他の民族を支配する不幸、矛盾は子どもの目を通して具体的に私の記憶に残っている。その事は戦後歴史の真実を知ることを通して確固としたものになっていった。当時は何も知らなかったで、無自覚に楽しいことも当然のことと思ってすごしていたのだが、その間にも土地取り上げ、言葉の取り上げ、名前の取り上げ(創氏改名)、命取り上げ(強制連行や徴兵制度)という冷酷な政策が着々とおし進められていたのである。

具体的な細かいことは省略するが、幼少の頃の朝鮮の大自然(山、川、森、草、花、樹、魚、鳥、けもの…)の豊さ、美しさの何と素晴らしかったことか。

私自身の小さな植民地時代の生活体験を通して民族同士の関係は平等で互恵でなければならぬと痛感する。まさに All peoples on earth are born equal. (地球上のすべての民族は生まれなが

らにして平等である)でなければならない。

##### 2. 軍国主義、国家主義、絶対的天皇制主義教育の悲惨な末路

戦前の教育の中で、日の丸、君が代、教育勅語は主柱であった。日中戦争時、日本軍の手に落ちた都市には日の丸がかかげられ、壁面の中国地図の都市には日の丸の小旗がはりつけられた。そのように日の丸は侵略の象徴であった。式典では君が代が斉唱され、教育勅語がうやうやしく校長によって朗読され、異様な静寂の中に児童のすすり上げる鼻水の音がひびきわたったものである。「天皇」の言葉が目上の人の口からでる時はいつも目下のものは電気に打たれたように不動の姿勢をとった。

中学1年から5年まで、男子中学生は軍人に準ずる姿(足には巻き脚絆が装着されていた)で登下校し、途中教師や上級生とすれちがう時は、拳手の敬礼をしなければならなかった。欠礼は鉄拳制裁を受けた。

こういう雰囲気の中で、思考の自由、批判的行動の育つことは不可能であった。教育勅語の示す道徳観が絶対であり、ほぼすべての少年は日本の行う戦争には疑いを持つことはなく、むしろ天皇や国のために身命を捧げることを名譽と考えていた。そして日中戦争から太平洋戦争という無謀な破局になだれこんでいった。

軍国主義、国家主義そして絶対的天皇制主義の愚しさを私は身をもって確認したのである。

##### 3 戦争体験の悲惨

私が17才、1941年の12月8日太平洋戦争が真珠湾奇襲を以って開始された。旧制山崎高校の1年生であった。行末の不安を直感した。当時の日米

の生産力や資源量の差はけた違いであったからである。高校を卒業した昭和18年(1943)には学徒出陣式典が神宮競技場で行われ、私は観覧席で先輩たちを送った。私自身は翌年(1944)海軍予備学生として中国の旅順港に送られた。敗戦は九州長崎県北部の田平町で迎えた。その年の暮までの命と覚悟していた私にとって敗戦は突如として洋々たる生きる展望を示してくれた。絶望して若い生命を絶った純粋な人びともいたから、不謹慎というがめはあるが私は目前の死から解き放たれた喜びを味わった。それが正直の感想であった。

それにしても戦争は幾多の悲劇をもたらした。出身中学や高校の同窓会名簿を開けば、学友の戦死は数多い。予科練に志願したT君は敗戦を目前にして沖縄で特攻隊員として若い命を失った。M君はビルマ戦線で、K君はフィリピン沖で海没、生前の生き生きした姿が思い出され痛惜の念にたえない。身内の両親の痛恨はいかばかりであったろう。私の従兄はガタルカナル島の戦場で悲惨な死をとげた。叔母のもとに送りかえされた遺骨の箱には石ころが入っていた。

一夜にして10万の命を奪った昭和20年3月10日の東京大空襲、8月の広島と長崎の原爆の悲惨は言うまでもない。

朝鮮に在住の両親と弟は1年の抑留生活という辛苦を経て翌1946年秋にやっと帰国し、経済基盤が失われた結果、我が家の生活は極貧の水準をしばらく低迷するのである。戦後衣食住の状況は極度の悪化となり「一億総乞食」という言葉をしばしば耳にすることがあった。

戦争は日本に惨害をもたらしただけでなく、周辺のアジア近隣の諸国(中国、朝鮮、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ベトナム等)にも惨禍を与えたことを忘れてはならない。最近問題化した朝鮮人従軍慰安婦のことはその片鱗にすぎないことを思い知らねばならない。

自国の被害、他国への加害の重大、深刻さを思うとき戦争を二度とおこしてはならぬ、おこさせてはならぬと思う。

#### 4. 旧制高校(1941~43)の自治と自由の中で批判的思考に目覚める

軍国主義、国家主義漬けの私にとって、自治と

自由の雰囲気を残していた旧制高校の学園生活は別天地であった。軍事教練はあったし、ファシストの言動を持つ教授も何人かはいたけれど、新入生の私にとってこんな世界があったのかという思いがあった。

このような自由な雰囲気の中で、私の心の中には「本当の学問とは何か」を問う探求心と批判的精神の芽ばえがあったと思う。未だ過去の殻から脱皮しきれない点が多々あったけれども。

一つだけエピソードをつけ加えておくと、「経済学」を教えられた某教授は講義の終りに必ず「…ということになっておりますが、これで良いのでしょうか」としめくくっておられました。これは学生に「懐疑の精神、批判の心がなければ真理は発展しないのだ」ということを暗黙のうちに示唆されていたと今になって思いあたるのですが、半世紀をへだててしまった今日確かめるすべはありません。思い出に残る言葉です。

このようにして旧制高校は私に偉大な精神的贈り物を与えてくれたと思う。

#### 5. 日本国憲法の理念に納得し、教師の使命感を確認してスタート

私は戦後2年たってやっと、昭和18年9月に入学した東京帝国大学文学部に復学し、昭和24年9月に卒業した。通常3年の課程に6年かかった。経済的に苦しかったから授業料は滞納となった。卒業を前にして安田講堂の下にある事務局に未納の250円を納めた。その時窓口の事務職員が「ご苦労様でした」と言葉をかけてくれた。思いやりと励ましの言葉であった。私は感激した。

何とか卒業し、東京都の教員採用試験を受けて都立高校の教員になった。先輩の口ぞえで名門都立戸山高校に就職した。高校生がいやに大きく見えた。未熟な新米教師であった。

私は日本国憲法の理念である民主主義、平和主義に納得し、そういう民主的平和国家に役立つ人間を育てるという使命観に燃えて1949年10月教師としてスタートを切った。

当時、民主的平和主義的教育を求め、期待し、実現しようという意気込みは教師にも生徒にもそして父母にも火のように熱いものがあつた。

しかし1949年という時は翌年勃発する朝鮮戦争

の前夜で、松川、下山、三鷹事件等が続発し、日本という巨船はまたもや平和主義、民主主義に逆らう方向に進路をかえようとしていた。その年に私は教師としての仕事を始めた。波乱にみちた前途を予見する力は当時の私にはなかった。

以上の5点が私の教師を始めるに当たっての前程であり、原点であった。

## II 英語（外国語）教育の意義と目的

1. 外国語教育は国際理解、他民族とその文化の尊重、敬意を通じて世界平和に貢献することが目的である。利己的、非平和的な目的を目指すものであってはならない。

### 2. 私が英文科を選んだわけ

私は父の仕事（当時は官舎と役所が隣接し、父の仕事ぶりがよく見えた。）や助言の影響を受けて将来は大学の法学部を出て父のような仕事をしようと思っていた。しかし山口高校の文科甲類を卒業した時、東大法学部を受験したが、勉強不足と学力不足で失敗した。戦争は激化の一途をたどり浪人して再受験する状況ではなかった。第2志望で文学部の英吉利文学科に入学することを許された。当時英語は適性語ということで風あたりが強かった。野球から英語は追放され「ストライク」「ボール」は「よし一本」「だめ」と言わねばならなかった。音楽の世界では「オルガン」は「あしぶみおとだしき」「サクソフォン」は「たけべらつきふきならし」…と言うことを強制された。陸軍では「ライスカレー」は「からみいりしるかけめし」と言うことになった。狂気の時代である。

私は陸軍見習士官候補生の受験をしたが面接試験の時、試験官の大佐殿から、「お前は何故英文科に入ったのか」と非難がましく詰問され、孫子の言葉「敵を知り己れを知らば、百戦危うからず」を引用し、叱責をまぬがれた体験を持つ。ことほど左様に狭量で野蛮な風潮が支配的であった。戦争に負けたのも当然であろう。

私が英文科を選んだのはやはり西欧の文化への憧れがそうさせたのだと思う。ロマンティズムである。

授業や講義はどうかと言うと、先輩たちは戦場になり出され、英作文の演習は3人くらいで、佐々木達先生の指導をうけた。中野好夫先生はすでに助教授でシェイクスピアの作品の講義等に出席したが、比叡山の荒法師を思わせる風貌であった。荒々しく、口の悪い所があったが、気持ちの優しい人からであった。

当時東京帝国大学には女子学生は1人もいなかった。だから昭和22年に名称も変った東京大学に復学して驚いたのは、かなりの女子学生が入っていたことである。世の中変ったなあ実感した。

## III 感銘を受けた人物と著書

### 1. バートランド・ラッセル Bertrand Russell (1872~1970)

昭和30年代の後半あたり、難関といわれる東大等の入試にはラッセルやサマーセット・モーム (Somerset Maugham—1874~1965) の著作からの出題が多かったと思う。だからという訳でもないが、ラッセルの作品は副教材として戸山高校の3年生には良く使われた。

ラッセルは数学者であり、哲学者であり、平和主義者であった。彼は祖父 John Russell (1792~1878) が英国の首相を2度にわたって勤めたこともある名門の出身であり貴族であった。彼の pacifist としての主義、主張と活動は生涯一貫し不変であった。

以下、生徒と共に学んだいくつかの彼の著作に簡略にふれて見たい。

#### ① Portraits from Memories (追憶の肖像)

この中の一章に Autobiographical Talks (自伝的談話)があり、そこで Experiences of a Pacifist in the First World War (第1次世界大戦中の一平和主義者の体験) がのべられている。その一部を下に紹介しておきたい。

…I have at times been paralysed by scepticism, at times I have been cynical, at other times indifferent, but when the war came I felt as if I heard the voice of God. I knew that it was my business to protest, however futile protest might be. My whole nature was involved. As a

lover of truth, the national propaganda of all the belligerent nations sickened me. As a lover of civilization, the return to barbarism appalled me. As a man of thwarted parental feeling, the massacre of the young wrung my heart. I hardly supposed that much good would come of opposing the war, but I felt that for the honour of human nature those who were not swept off their feet should show that they stood firm.

… (中略) …

For four and a half months in 1918 I was in prison for Pacifist propaganda;……

(訳) … 時には私は懐疑のために正しい思考力を失うこともあった、また時には人間の善意に対する不信にとらわれ、さらにはまたどうでもいいやという気分になることもあった、しかし戦争が起こったとき私は天の声を聞いたかのごとき感じであった。たとえ抗議がいかにむなしくとも、そうすることが私の任務であると知った。私の人格全体がこの任務にかかわった。真実を愛するものとしては、全交戦国の国家主義的宣伝に吐き気をもよおしたし、文明を愛するものとしては、(殺戮の)野蛮時代への逆行は私を戦慄させた。また子に対する親の愛を阻止されるものとして青年たちが大量に虐殺されることには胸をさかれる苦悩があった。

戦争に反対してもそこから大した効果が生じるとも思えなかったが、私は人間性の名誉のために、正気を失っていない人間達は、自分たちは毅然として立っているということを示すべきだと思った。……

1918年の4ヶ月半、平和主義宣伝活動の故に、私は獄につながれた。……

ラッセルの平和主義者としての毅然たる姿に、戦争体験の記憶をなまなましくもつ私たちは、教えるものも教えられる生徒も深く共感し、いかに生きるべきかの典型を見る思いがあった。

## ② Has Man a Future ? (1961)

1961年9月ラッセル卿は夫人と共に、90才の高齢をもかえりみず、陣頭に立って、核兵器反対の「座り込みデモ」を行った。英国防省の玄関前で

逮捕され、一週間の投獄生活を送ったのである。

90才の彼をこのような行動にかりたてたものは何か。米ソの核軍備競走、核実験の強行という当時の状況は人類を自滅へ導く可能性をはらんでいた。そういうさし迫った状況の中の1961年に書かれたのがこの書であり、彼の人間愛の深さと情熱そして予言的提言に多くのものを学んだ。

## ③ War Crimes in Vietnam (1967)

1960年に日本では安保大闘争があった。この年、南ベトナム解放民族戦線が結成された。1964年のトンキン湾事件をきっかけにベトナム戦争は一挙に拡大していった。残虐な戦がつづき米軍の戦死者は5万人以上、帰還兵士のうち10万人が米国内で自殺していると1986年12月のテレビは報じている。いかに非人間的戦争であったかが分る。ベトナム側の被害者はこれをはるかに上まわった。

この教材の一部を使った。なぜベトナム戦争が起こったかを分りやすく述べている。ベトナム戦争の実態が良く分った。平和主義者ラッセルの偉大さに感動する感想文が多数提出された。ベトナム戦争は私たちに平和の問題を深く考えさせていた。そのような時代であった。正義の小国ベトナムは、不正義の軍事大国を見事に打ちやぶった。全ベトナムが解放されたのは1975年のことであった。これは世界史の流れをかえる大事件であった。

## ④ Religion and Science (宗教と科学)

この書は青春の思い出と重なり、敗戦前後の激変と重なり、教材として教えた時(1965年)の私と生徒の感動とも重なり忘れ難い。

既にのべたように私は旧制高校時代を山口市で送ったが、文科の学生ではあったが、深い感銘を受けた講義はT先生の物理史であった。その要旨は「ニュートンが光の性質について光粒子説を唱えたが、それは光の全現象を説明しきれず、そこから波動説が生まれ、さらに量子論、相対性原理へと発展してきたこと、つまりいかなる理論にも綻び、矛盾があり、それがかえってバネとなり、より良い理論へと発展していく」というものであった。

ラッセルのこの書には、天動説の矛盾から地動説へ、聖書の記述と事実の矛盾から進化論への闘いへと発展が述べられている。例えば16世紀、当時絶対的権威をもつアリストテレスの理論は、実

験によれば事実と矛盾すると述べたガリレオは、彼の支持する地動説の故にローマ法王から弾圧された。「それでも地球は動く」と呟きながらも弾圧に屈したガリレオの抵抗と闘いがあったからこそ、科学は今日の盛大に至っている。真理に対する権力側の弾圧の歴史をかみしめなければならないと思う。

絶対的天皇制下の軍国主義、国家主義教育に培われた私たち世代の価値観は、敗戦を境に劇的に変転した。まさにコペルニクスの転回であった。その体験が、価値観を激変させたガリレオ、ダーウィン等の戦の記述を共感をもって読みとらせたのである。

次の二つの文は学問に志すものにとって大切な教訓と思うので英文と訳文をかかげておきたい。

The scientific temper of mind is cautious, tentative and piecemeal; it does not imagine that it knows the whole truth, or that even its best knowledge is wholly true. It knows that every doctrine needs emendation sooner or later, and that the necessary emendation requires freedom of investigation and freedom of discussion.

(訳)

科学的な精神は、用心深く、仮説的で、漸進的である。つまりそれは真理の全部を知っているとか、その最高の知識でも全面的に真であるとは考えていない。それはあらゆる学説はおそかれ早かれ修正されなければならないということ、そしてなくてはならない修正には研究の自由と討論の自由を必要とする。

Those to whom intellectual freedom is personally important may be a minority in the community, but among them are the men of most importance to the future. We have seen the importance of Copernicus, Galileo, and Darwin in the history of mankind, and it is not to be supposed that the future will produce no more such men. If they are prevented from doing their work and having their due effect, the human race will stagnate, and a new Dark Age will succeed, as the earlier Dark Age succeeded the brilliant period of antiquity. New

truth is often uncomfortable, especially to the holders of power; nevertheless, amid the long record of cruelty and bigotry, it is the most important achievement of our intelligent but wayward species.

(訳)

知的自由が個人的に重要な人びとは社会では少数派かも知れない。しかしそういう人びとの中に未来にとって最も重要な人間たちがいる。我々は人類の歴史の中でコペルニクス、ガリレオそしてダーウィンの重要性を見てきた。そして未来がこういう人間を最早生みださないとすることを想像することはできない。もしこういう人びとが彼らの仕事をしたり、しかるべき影響を及ぼすことができなければ人類の進歩は停滞し、中世の暗黒時代がギリシア、ローマの光輝く時代に引きつづいたように、新しい暗黒時代がやってくるだろう。新しい真理はしばしば不快なことがある、特に権力を握っているものにとっては不愉快なものである。にもかかわらず、それは残酷と頑迷固陋の長い歴史の中で、我われ人間という知力を持つが気まぐれな種(生き物)の最も重要な業績なのである。

## 2. 米国の独立宣言 (The Declaration of Independence of the United States of America) (1776) と ベトナム独立宣言 (1945)

1976年はアメリカ独立200周年であった。アメリカの民主主義の流れをくむベトナムの独立宣言(1945年)を高校3年生の自主教材として読むことにした。1975年はベトナム勝利の年であり、翌1976年にはベトナムに対する関心、興味は高まっていた。この教材はタイムリーであったと思う。この宣言にはフランス帝国主義、そして日本帝国主義の罪悪が前半に述べられている。日本がアジアの近隣諸国に第2次世界大戦中にいかにひどい迷惑損害を加えていたか。それがここにも述べられている。国際理解、特に近隣アジア諸国の理解を進め、国際的視野、感覚を育てる上でこの教材は適切なものであったと思う。アメリカ独立宣言での All men are created equal. (すべての人間は創られて平等である。)という言葉がベトナム独立宣言では、冒頭で紹介したように All peoples

on earth are born equal. (世界のすべての民族、国民は生まれながらにして平等である)に発展しているのが素晴らしかった。これを読んで生徒は世界史的認識(日本とベトナムのかかわりの認識)を深めると共にベトナム民族への尊敬をあらたにしている読后感想文が多かった。

資料としてベトナム独立宣言(英文)と訳文の一部を以下に紹介する。

#### Declaration of Independence of Viet Nam

September 2, 1945

“All men are created equal… They are endowed by their Creator with certain inalienable rights. Among these are life, liberty, and the pursuit of happiness.”

These immortal words are from the Declaration of Independence of the United States of America in 1776. Taken in a broader sense, these phrase mean: “All peoples on earth are born equal; all peoples have the right to live, to be free, to be happy.”

……

(訳) ベトナム独立宣言(1945年9月2日)

「すべての人間は創られて平等である。人々は創造主によって奪うことのできない権利をさずけられている。これらの中には生存権、自由権そして幸福追求の権利がふくまれる。

これら不滅の言葉は1776年のアメリカ合衆国独立宣言に由来する。意味を広げて考えるならば、これらの言葉は「世界のすべての民族、国民は生まれながらにして平等である。すなわちすべての民族、国民は生きる権利、自由になる権利、幸福になる権利を持つのである」ということを意味する。(以下略)

### 3. マーティン・ルーサー・キング Martin Luther King, Jr. (1929~68)

彼は黒人出身の牧師であり、アメリカ黒人の公民権獲得運動の指導者であり、その運動は非暴力主義の立ち場で行われたが、彼はその活動の最中暗殺された。

1963年、ワシントン大行進の時、リンカーン記念堂の前で行われた彼の演説 I Have a Dream は英語で述べられた演説の最もすぐれたものの一

つであろう。テープに残されたキング牧師のスピーチは大河のごとくである。真実と正義と理想を語る英語とはこんなに素晴らしいものか。このスピーチは生徒に心の底からゆり動かすような感動を与えたのである。

最も感銘の深い部分を生徒に問う。圧倒的に多かったのは次の一節であった。

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

(訳) 私には夢がある。それは、私の小さな4人の子供がいつの日か、そこでは人の値打ちが肌の色ではなく、人格の中味によって判断される国に住むであろうという夢である。

このような偉大な黒人の政治的指導者の演説を学び、また人類の普遍的理想の語られるベトナム憲法を読み学ぶとき、本当の意味での国際理解と世界的人類の視野が身につくのではないだろうか。

### 4. チャーリー・チャップリン Charlie Chaplin (1889~1977)

私はチャップリンの伝記(易しい英文で書いたもの)の編注を行ったことがある。その書(桐原書店刊)の「まえがき」に大むね次のようなことを記した。

「チャップリン! 何という偉大な人間、何という人間らしい天才を現代は生み出したのでしょうか。しかも今なお私達はその優しくも偉大な業績に、映画という生き生きした姿で触れることができるのです。

彼は1889年ロンドンに芸人を両親として生まれました。当初一家は比較的豊かな生活を営んでいました。しかしその後父はアルコール中毒で37才で死亡、母は過労と病で歌手としての仕事を失い、さらに精神の錯乱で精神病院に送られ、一家は悲惨な境遇を強いられることとなります。チャップリンは幼少とは言え、非情な社会の現実の中で文字通りどん底の生活を余儀なくされたのでした。ただこうした体験こそ、彼の人間性を鍛え、深め、後の映画俳優及び製作者としての豊かな稔りの肥料になったといえましょう。傑作「街の灯」を撮

影するに際してチャップリンはこう言っています、一美は悲しみの中にあります。言い知れぬ辛酸をなめてなお希望を捨てなかったチャップリンの芸術観がここには簡潔に表出されているように思えます。

しかし、チャップリンは単なる芸術家にはとどまりませんでした。

チャップリンは第一次、第二次世界大戦の時代を生きています。それは人間が大量に虫けらのように殺される戦乱の時代でした。また大衆を酷使し、その人間性を破壊する時代でした。彼は、そういう時代を生き抜いた良心の人として、平和と人間を愛し、戦争を憎み、人々を酷使する機構を批判し、「モダン・タイムズ」「独裁者」「殺人狂時代」等の映画を製作したのでした。チャップリンの人間観、政治的信念は「独裁者」の演説の中に凝縮されています。その中には、平和と人間の自由を奪うものへの怒りと、名もない人々への愛がみまがっています。

私たちをとりまく世界状況は不穏で相変わらず平和は脅かされているように思えます。こうした現代にあってこそチャップリンの生き方、考え方が真に理解されねばならないと思います。…以下略

上の文は1980年春に書いたものである。

私は彼の作品の中から「独裁者」The Great Dictator (1940年)をとり上げたい。これは前年(1939年)ポーランド侵攻によって第二次世界大戦を引き起こしたヒトラー(1889~1945)を批判し、攻撃した映画である。その映画の末尾で彼は演説を行っている。これは英語で行われた名演説として、既にのべたキング牧師のI Have a Dreamと並ぶものであろう。

彼は人類の将来について先見的な考え方をもっていると思う。彼は独裁者の演説の中で… to do away with national barriers …「国境を廃止せよ」と言っている。そしてそういう考え方はEC (European Community)「ヨーロッパ共同体」(1967~ )として実現発展している。

彼のもう一つの先見的な考え方は1947年に製作された「殺人狂時代」Monsieur Verdouxに示されている。「一人殺せば殺人罪だが、戦争では大量殺人者は英雄になる」そういう道徳の二重性を痛

烈に批判したのである。

チャップリンを教えることは、平和主義と人類の未来への展望を教えることになると思う。

## 5. ヘレン・ケラー Helen Keller (1880~1968)

盲目、聾、啞、三重苦を克服した偉大な女性ヘレン・ケラーの自伝 The Story of My Life は感動的であるばかりでなく、文芸的にも見事というほかない。

四季の移り変りを触覚でとらえて表現した情景、散歩の途中で突然嵐に襲われる様子を嗅覚をも働かせて描写する迫真の場面、ギリシア彫刻の美しさを手ざわりで鑑賞し感動するシーン等のいくつかが生々しく記憶によみがえってくる。

ヘレン・ケラーのこの自伝は英語を学ぶものに是非とも読ませたい作品の一つである。そこから私たちは生きる知恵、人生をいかに味わうべきかについて多くのことを学びとることができる。

## 6. ジョージ・オーウェル George Orwell (1903~1950)

本名はEric Blair、大英帝国植民地のインドに、税関官吏の子として生まれた。イギリスの上流階級の子弟を教育するパブリック・スクールの名門校イートンに学んだが、当然予想されるケンブリッジ大学には進学せず、英国の植民地ビルマ(現在のミャンマー)の警察官として就職した。植民地政策機構の最前線というか、末端にある警官という立場はビルマ民衆の利益と鋭く対立し矛盾する。彼はそのはざまにあって人間として苦悩し、植民地における強権支配のむなしさを実感した。それは彼の随筆 Shooting an Elephant に生き生きとえがかれている。この作品は文部省検定の教科書(一部分省略)にもとり上げられていたが、私の場合は原文で教えた。

次の一節は私にとって感銘が深かった。それは自分の幼少年時代における植民地朝鮮の見聞と重なる所があったからである。

I perceived in this moment that when the white man turns tyrant it is his own freedom that he destroys.

(訳) この一瞬の間に、白人が暴君になるとき彼が打ち壊しているのは実は自らの自由であること

を私は悟った。

オーウェルの作品はそのほか、Animal Farm「動物農場」が多く的高校で副教材として好んで読まれたが、この作品は1945年に書かれており、当時独裁者スターリンの手に落ちていたソビエト連邦の今日の崩壊を予見した作品として、彼の先見の力量に驚きの念を禁じえない。

## 7. アルバート・セント・ジョルジ Albert Szent-Györgyi (1893~1986)

Why does man behave like a perfect idiot?

(何故人類は全くの阿呆者のように振る舞うのか) というショッキングな一文で始まる、彼の著書 The Crazy Ape は滅亡の危機に直面する人類に対する警告の書であり、啓蒙 (enlightening)、啓示 (revealing) の書であろう。

筆者は今世紀最大の生化学者であり、ビタミンCの発見などの業績でノーベル賞を受けたアルバート・セント・ジョルジ博士である。

博士は1986年93才の高齢で他界されたが、死の直前まで癌の生態と治療法の解明に努力された。同博士は単なる科学者ではない。ハンガリーの名家に生まれた彼は青年期から壮年期にかけて、欧州政局の激動に身をさらし、ヒトラーの秘密警察に追われ、スターリンに批判的直言を行ってその機嫌を損じ、そのためソ連を逃れて避難を希望したアメリカからはソ連に近すぎることを理由に入国を保留されるなど多難な生涯を送って来ている。一度はナチ・ドイツの滅亡後のハンガリー大統領に推されたこともあって第二次大戦前後の激しく動く国際政治の中に身をおいた。

博士は一貫して平和主義者の立場に立ってきた。第一次大戦中、イタリー戦線に従軍中なんの恨みもない「敵兵」を殺すという非道徳性と愚かしさに耐えきれず自らの右手を射ち戦線から後送され、処罰されることもあった。

彼の著書では、人類は現代の困難な状況をいかに生きのびて行くかという視点から、また教育的な視点から次の四点を重視したい。

### 1. 世界の愚劣な政治状況の認識

これは1970年頃の世界の政治状況であるが、彼はつぎのようにのべている。

… In the most affluent country of the world, five per cent of the people are starving. Fifty per cent are starving in the rest of the world—children do not get enough food to build healthy minds and bodies, and go to bed hungry. While this is going on the United States alone has spent since the Second World War a trillion dollars (\$ 1,000,000,000,000) on “defense”, on instruments of mass killing. The Soviets, of course, are not lagging far behind.… This is a truly criminal story, yet it is not merely criminal. It is utterly stupid too,...

(訳) 世界で最も富裕な国(米国)においてさえ、国民の5%が飢えている。世界のその他の地域では50%の人が飢えている——そこでは子供たちは健全な身心をつくるのに十分な食べ物もえられず、空腹をかかえて床に就く。こういう状況が進行している一方、米合衆国だけでも第二次世界大戦以後1兆ドルを「防衛」(かっこつきの防衛)つまり大量殺人兵器(核兵器)に注ぎ込んでいる。もちろんソ連もおくれをとってはいない。

…これは真に犯罪的な話である、いや犯罪的であるばかりではない。それは愚劣極まることでもある……

昨年(1991)秋であったと思うが、日本経済新聞の記事の中で、元米国国防長官マクナマラ氏は、「現在、年間全世界では8,000億ドルの巨費が軍備に消費されているが、その半分でも福祉、民生につかわれれば、人類の生活水準は大きく向上するだろう(趣旨)」とのべている。国防長官といえ、日本の防衛庁長官に当るわけでそういう人物がこの愚劣な状況を認識するほどに状況は深刻化しているのであって、私たちはこういう現状を未来を背負って立つ若い世代に伝え認識させる責任があると思う。

### 2. 道徳の2重性

このことは、既にのべたようにチャップリンの考え方と共に先見的な、人類が未来に生きのびて行く上で重要な知恵というべきであろう。

この著書の The Duality of Morals (道徳の2重性) という章から次の一節を紹介する。

This double moral is generally accepted and

is applied by governments in matters of foreign policy. Where the difficulty comes in is that modern science has abolished time and distance as a factor in separating nations; on our shrunken globe today there is room for one group only, the family of man. There can be, thus, one moral code only. "My country right or wrong" worked only while nations were separated by distance. Since distance has disappeared and man is for all practical purposes bound into one group, we will have to call murder "murder," regardless of the color, uniform or passport of the murdered. Likewise, we will have to punish murder accordingly, whether single murders or mass murders, not excusing it even if politics are called in as the motive.

(訳) この2重の道德規範は外交政策の問題で、諸国政府によって全体として受け入れられ用いられている。問題点は現代科学が国家と国家を分ける要素としての時間と空間を消滅したということである。我々の縮小してしまった今日の地球上には一つの集団つまり、人類家族をうけ入れる余地しかないのである。こういうわけで一つの道德規範しかない。「良くも悪くも自分の国は」という考え方は諸国家が距離によってへだてられている時にのみ有効であった。距離が消滅して事実上、一つのグループにまとめられている以上、我われは、殺された人びとの皮膚の色、制服、国籍にかかわりなく殺人は「殺人」と呼ばなければならないだろう。同様に、個人的殺害であれ大量殺害であれ殺人は殺人として等しく処罰しなければならないだろう、たとえ政治が動機として導入されてもそれを免罪することはできない。

戦前、私たちの世代の日本人の受けた軍国主義的、国家主義的、絶対的天皇制主義の教育の三本柱は、日の丸、君が代、教育勅語であったと言える。

教育勅語は次のように言う。

(前略) …爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ…… (略) …一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天

壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ… (略)

上にのべた道德律については「博愛衆ニ及ホシ…」までには異論はない、普遍的なものとして受け入れられる。しかしその後の「一旦緩急アレハ…」に至って大逆転がある。戦争があった時には前の一切をなげうって天皇のため、国家のため奉公しなさい、場合によっては生命をささげて敵を撃滅(殺害)しなさい。そうゆうことになる。ここに道德の2重性が明白に語られている。これが国家主義的倫理の正体である。

すでにのべられたようにこの縮小した地球ではこういう2重性は時代遅れのものとなったのである。このような2重性を持つ道德に固執する国民にそして人類には未来がないとジョルジは言っているし、私もその通りと思うのである。道德の1元化を青少年に理解させたいと思う。

### 3. 科学的精神

人類を破滅から救出する原則は何か。ジョルジ博士は、宗教にはその力量はないと宗教の血なまぐさい歴史を回顧してのべる。そして次のように言っている。

The spirit of science is that of good will, mutual respect and human solidarity. This results from the fact that science was not built by any single nation or race, but is the common property of man, having been created by peoples of the most different back-grounds and descents. Scientists form one single community which knows no borders of space or time. Although I am living in a certain community at a certain time, Newton, Pasteur and Bach are my daily companions. Any scientist is closer to me than my own milkman and, as the Pugwash conference showed, we scientists can discuss our problems peacefully, even if governments would like to see us separated as enemies.

(訳) 科学の精神は善意と、相互尊敬と人類の団結の精神である。これは、科学はいかなる単一の民族や人種によって作られたものではなく、人類共通の財産であって、それは極めて違った歴史的伝統的背景を持つ諸国民、諸民族によって作られたものである。科学者たちはいかなる空間的、時間的境界をも持たない単一の社会を形成してい

る。私はある一定の時代のある一定の場所に生きているのだけれど、ニュートン、パストゥールそしてバッハは私の日頃親しんでいる仲間である。科学者は誰であれ私にとっては私の牛乳配達人以上に親密な間柄であり、パグウォッシュ会議が示したように、たとえ諸国政府が我われ科学者が敵、味方として分裂しているのを期待していても、自らの問題を平和的に論ずることができるのである。

(注) the Pugwash conference パグウォッシュ会議。1955年にアインシュタイン博士とB・ラッセル卿が行った核兵器絶滅声明に応じて、1957年7月カナダのパグウォッシュで世界中の物理学者を集めて開かれた会議。日本からも湯川秀樹、朝永振一郎教授等が参加した。

ジョルジ博士は世界平和を確立する上で国境を超える科学的精神が基本になると確信をもってのべる。これは貴重な提言として傾聴すべきである。

#### 4. 学力観

私はこの本を読んで、学力の質を考える上で特に感銘し共感を覚えたのは、第10章 Life vs Death の次の一節である。

When I discovered Ascorbic Acid (Vitamin C), I felt proud to have made a contribution to science which could, in no way, contribute to killing. My pride was short-lived, however. One day, while visiting a factory, I noticed a collection of large jars and was told that they contained crude preparations of Ascorbic Acid. These were placed in German submarines and enabled them to stay at sea for months on their death-dealing missions without the crew breaking down with scurvy.

(訳) 私がアスコルビック酸(ビタミンC)を発見した時、私は人殺しには役立つことのない貢献を科学に対して行ったという思いで誇らしかった。しかしその誇らしさも短命であった。ある日のこと、ある工場を訪れていた時に、大瓶がたくさん集められているのがつき、そしてそれらの瓶にはアスコルビック酸の粗製品が入っていることを聞いた。これらはドイツの潜水艦につみこまれ、そのおかげで乗組員は壊血病にかからずに、人殺しの任務を遂行できたのである。

人の病気、生命を救うために作られたはずの薬が、間接的だが殺人任務遂行のために使われていることを知って博士は衝撃を受けたのである。

核兵器は人類の最高の科学によって生み出されてしまった。人類自らの学力と技術によって作り出した滅亡という悲劇に人類は直面している。核という刃物を扱うものが狂人であっては困る。

学力は人間を生かすために、幸せにするために使われねばならない。このことを教えるのも、学ぶものも肝に銘じておかねばならない。

この項の終りに、The Crazy Ape の読後感想文(高校3年男子・1975年)を紹介しておきたい。

M・T君(高3男)

読み始めて感激、そのままずんずん読んでいくと、つぎにはジェルジュ博士は未来の現実的展望を欠いているのではないかという疑問が起り、さらに読み続け“The Way Out”の終章において再び意見が一致して共感。

とくに、読みながら思ったのは、これからの時代は科学者が政治を論じ、哲学を論ずるべきであるということであった。逆に言えば、科学者は研究室に閉じこもった単なる技術屋から脱皮し、自己の作り出した技術が社会にどのような影響をもたらすかという責任を背負い、より大きい視点に立って生きるべきである。

こうしたことからさらに言いかえれば、博士も言っているように政治が二枚舌のレトリックで行われるのではなく、科学的認識に基づいて運営されるべきであり、したがって社会科学の分野において客観的で、実証的に認識方法が確立され、普及していくこと、そして国会の答弁に見られるような、言葉をこねくりまわしながらなんとかウソの上に自らの政権を維持しつづけようとする政治屋たちを一日も早く過去の遺物にしてしまわなくてはならないということである。それらのことを痛感して、私は正義感にかきたてられた。

#### IV 主体的、能動的学習を目指す——自己表現

外国語授業を効果的に進めて行く上で重要な視点の一つは自己表現である。

自己表現はなぜ授業や学習を活性化できるか。  
その理由は次の通りである。

- ① 人間疎外の学習ではなく主体的な学習であり、人間性の回復される学習である。
- ② 丸暗記の模倣学習を超える創造的な学習である。
- ③ 学習集団の中での自己表現は他の自己表現と交流発展し、相互評価をへて質の高い集団へ成長していく。そして集団の中でそれぞれの個性と学力は豊かに成長していく。

## 1. 英作文の授業で

私は英作文の授業では、教科書の問題文をやるばかりでなく、教師の自己表現である自作の問題を与えた。

その例

### ① 文型 仮定法過去完了の文

問題 もし私が平安時代の中頃に京都で生まれていたら、紫式部や清少納言に会えたかもしれない。

訳例 If I had been born in Kyoto in the middle of the Heian Period, I might have met with Murasaki Shikibu and Sei Shonagon.

### ② 文型 the+比較級…、the+比較級…

問題 地価が上れば、上がるほどマイホームの夢は遠くなる。

訳例 The higher the price of land is, the farther away the dream of having one's own house becomes.

### ③ 文型 結果の表現法 (不定詞)

問題 青年は目をさまして見るとゴキブリ (a cockroach) になっていた。

訳例 The youth woke up to find himself (changed into) a cockroach.

(注) これはオーストリアの作家 Kafka (1883~1924) の小説「変身」にヒントを得た。

### ④ 文型 too…to…

問題 ナマコはあまりにもグロテスクで私には食べられない。

訳例 The sea cucumber is too grotesque for me to eat.

(注) 生徒がドット笑い、反応を示す問題であった。私はナマコは好きであるが、…

次に、生徒に問題を作らせた。

その作品例

### ① 文型 the+比較級… the+比較級…

問題 ホームランを打てば打つほど月給が上がる。

訳例 The more homers a baseball player hits, the higher his salary becomes.

(注) これは大ヒット作。男子高校生ならではの作品。教師には思いつかない。

### ② 譲歩の表現法 ~ever+主語+動詞+…

問題 どんなに沢山ピーナツをたべても、政治家は腹痛を起さない。(高3男子)

訳例 However many peanuts statesmen eat, they never have a stomachache.

(注) 諷刺がきいている。何年かたってピーナツ、ピーズの意味もピンとこなくなっている。言葉はまさに生きている。これはスーパーヒット作。1976年の作品である。最近も佐川急便等のスキャンダルが続発し、政界は一向に浄化しない。

### ③ 結果の表現法 too…to…

問題 私の心はさめすぎて恋に落ちられない。

訳例 I am too cool to fall in love.

(注) 教師の私には思い及ばない心境。作者(高3女)は大学の仏文科に進学した。

### ④ 仮定法過去

問題 あなたなしで生きてゆけたらなあ。

訳例 I wish I could live without you.

(注) 高3女子の生徒のデリケートな心理がよく出ている。

生徒の英作文問題作品例はこのへんで打ち切りたい。

## 2. 生徒の作るスピーチから

生徒たちの作る英作文問題から発展して、生徒たちの英語によるスピーチに至るが、その作品数は実に1000をこえると思う。その中から印象的なものを2つ紹介したい。因みに、私は生徒、学生のスピーチはもれなくすべて録音テープにおさめてある。

① Let's Keep Japanese Musical Tradition Alive. by KUNII Toshifumi (国井俊史君) (in 1973)

My dear freinds, I have been practising NAGAUTA for thirteen years. This is different from YÖKYOKU which Mr. Makino encourages. It is sung to the SHAMISEN and has melodies peculiar to Japan. A characteristic of NAGAUTA is KUDOKI. KUDOKI is a part where the singer appeals his heart to his listeners. This part is the most difficult in NAGAUTA.

I like Japanese music such as NAGAUTA, YÖKYOKU, Japanese folk songs, and so on, because these have the essence of human kindness.

But recently foreign music has been in fashion. And the number of those who want to keep up the tradition of Japanese music has become smaller and smaller. I think that soon the simple and calm tradition of Japanese music will go away. I am sorry to think of it.

After all I think Japanese music suits us.

Everybody, let's keep up Japanese music! Let's keep Japanese musical tradition alive! In the future I will continue to practise NAGAUTA and keep Japanese musical tradition alive. Thank you.

(要旨) 僕は13年間長唄を練習して来ました。私は邦楽が好きです。邦楽には長唄、謡曲、民謡などがあります。邦楽が好きなのは、人の心のやさしさがこめられているからです。最近、洋楽が盛んとなり、邦楽が衰退しているのは残念でなりません。とにかく邦楽は日本人の心にぴったりです。邦楽の伝統を守ろうではありませんか。僕は今後も練習を続け、日本の音楽の伝統を守りたい。

彼のスピーチは拍手かっさいを浴びた。好い機会であったから、私は彼に長唄の独唱を頼んだ。クラス一同大喜びであった。彼は朗々たる声で、「旅の衣は鈴懸けの…」を唄った。実は彼は白血病に倒れ、卒業することなく帰らぬ客となった。

しかし彼は私たちに立派な形見を残してくれた。1973年初夏のことであった。

次のスピーチは高校1年の男子生徒によるもので、内容がユニークで大好評であった。1984年の作品で、この年の春、私は35年勤めた戸山高校を退職した。

A Toilet in China M.A. (高1男)

My dear classmates, I'll tell you a story about a toilet in China. Last year I took part in the "Tokyo Yōjō Seminar" and went to China. We visited Peking, T'ienchin and Shanghai. An accident happend in Peking. One evening at dinner, I ate Chinese food. It tasted very good. Of all the foods, Peking duck was the best. I slept very well that night. The next day morning we went to the 'Tendan Park'. There was a cylindrical tower named 'Kinenden'. The cylindrical tower had been shown in the case of 'Chūkazanmai' (noodle) before. This is the place. I had photographs of my friends and me taken in front of the tower. Suddenly, I had a stomachache. (笑い) I understood why I had a stomachache, because the day before I ate too much at dinner. I wanted to go to the toilet. But I didn't know where it was. So I found our guide and asked where it was. The 'Tendan Park' was a large park. At last I reached the toilet. I was glad. (笑い) At this time I was very surprised at the toilet construction. In Japan there is a door at the entrance of every personal toilet room. (笑い) So no one can see a person who is inside the door. (笑い) But there is no door. (笑い) I can't believe my eyes. (笑い) I sit down on a commode. (笑い) As soon as I sit down there, a few Chinese people come in. And they look at me for a long time. (笑い) Probably they must think that here is a boy, here is a Japanese boy and wonder what this boy's name is. They look at my face closely and the name plate ... then they smile at me. (笑い) I can only sit and smile. (笑い) I left the toilet. At this time I knew one thing. Some

shameful things in Japan are natural things in other countries. This happening made me understand how Chinese people feel. So I felt very comfortable. Thank you. (拍手)

(要旨) 中国のトイレ——中国のトイレについて話そう。昨年は東京都洋上セミナーに参加し、中国へ行った。北京、天津、上海を訪れた。事件は北京で起こった。ある日の夕方、夕食で私は中国料理を食べに食べた。とても美味しかった。中でも北京ダック(鴨料理)は最高だった。その晩は良く眠った。翌朝、私たちは天壇公園に行った。祈年殿と言う名の円塔があった。その円塔は“中華三昧”(インスタントラーメンの商品名)の袋に示されている。私は友達と一緒にその塔の前で写真をとった。その時、突然、お腹が痛くなった。

(笑) 私はその理由が分かっていた。昨晚食べすぎていたのだ。トイレに行きたくなった。しかしどこにあるのか分からなかった。それでガイドをさがし場所を聞いた。天壇公園は広い。遂にトイレに着いた。私はうれしかった。(笑) この時私はトイレの構造を見て驚いた。日本ではトイレの入り口には戸がついている。だから中に入っている人は見えない。(笑) しかし、中国では戸がない。わが目を疑った。(笑) 私は便器に腰を下ろした。私がしゃがむや否や数人の中国人が入って来て、私を長い間見るのだった。(笑) ここに居るのは日本人の少年で名は何というのだろうかと考えていたようだ。それから私ににっこり笑いかけた。(笑) 私はただしゃがんでほえむだけであった。(笑) 私はトイレを出た。この時、私は1つのことが分かった。日本で恥ずかしいことが外国ではあたり前なのだという事。この出来事で中国人の気持ちやどんなものか私には分かった。そして私はとてもいい気持ちだった。

爆笑また爆笑のうちにこのスピーチは終了した。クラスの空気が喜びにあふれ生き生きと和かであった。自己表現学習の一形態であるスピーチはクラスの集団化に役立つことをこのスピーチを聞いてしみじみ思う。

自己表現学習の実践を幾つか紹介したが、自己表現の視点がなければ、私の授業の楽しみは半減しただろう。

## V おわりに

この講義をしめくくるにあたって私は平和教育の重要性を強調したい。私の戦争体験から再び戦争を引き起こすことがあってはならないと思うからである。「戦争は人間の宿命だ」と言う人がいる。それは誤りである。私が教えた文部省検定教科書 Highroad to English II (読本) に Can We Change Human Nature? (「われわれは人間性を変えられるか」という課があって、その要点は次のようであった。

ある中国人の科学者が、Is it part of the nature of cats to kill mice and rats? (ねずみを殺すのは猫の本性に根ざすものか) という問題提起を行い、それを子猫の実験を通して解明した。彼は子猫をA B Cの3グループに分けた。Aグループは生まれてすぐから、母猫によりねずみを殺さず仲良くする教育(平和教育)を受ける。Bグループは母猫はなしで、ねずみと共に成育する。Cグループは4日毎に母がねずみを殺すのを見る教育(軍国主義教育)を受ける。その結果は次のようである。Aグループの猫では18匹中ねずみを殺したのは3匹、Bグループでは20匹中ねずみを殺したのは9匹、Cグループでは21匹中ねずみを殺したのは18匹であった。教育の効果が見事に示されている。

筆者はつぎのようにしめくくる、

The history of the experiments on kittens is only one of the examples to show that war is not an unavoidable evil rooted in human nature. The next step, if we want to do something practical, is to show that the basic causes of wars are mainly economic, and then to do our best to put an end to the economic causes of war.

(大意) この子猫の実験の話は、戦争は人間性に根ざす避けることのできない悪ではないということを示す事例の一つに過ぎない。もし何か実際的なことをしたければ、次にやるべきことは、戦争の基本的原因は主として経済的なものであることを明らかにし、それからこの戦争の経済的原因をなくすため最善をつくすことである。

私も上の考え方に賛成である。そして無知からの解放と真実を教えることが教育の仕事であると思う。それが平和教育の基本である。

次に強調したいのは真の道德教育を行うこと、つまり道德の2元性を1元化することである。これは科学技術の発達により縮小したこの地球の現状が要求している。チャップリンは国境の廃止を訴え、ジョルジは科学の超国家性を説く。

三つめに、科学教育と歴史教育の重視である。前者は危機に直面する人類環境の保護のために、後者は偏見と差別を無くし、人類の平和を確立す

るために重視すべきである。

終りに、私が学んだ先人、仲間ばかりでなく、教え子の皆さん、その父母の皆さんに心から感謝いたします。

私事で恐縮ですが、42年間、健康管理、栄養補給等私の身心を支えてくれた妻に対し感謝したいと思います。

有難うございました。

おわり

(いしい きよし 教授)

(1992. 3. 25受理)